

何のための五輪

写真は朝日新聞 5 月 22 日朝刊「耕論」。東京五輪の「開幕日」まで 2 ヶ月を切った。3 人の論者が「何のための五輪か」との問いに答える。2 人の耕論を抜粋して紹介。

まず、元ラグビー日本代表の平尾剛さん。私はスポーツに育てられた人間ですし、「スポーツの力」を信じています。原始的な社会では、身体能力はそのまま生き延びるための力だった。身体を使うことが少なくなった社会で、アスリートのパフォーマンスは生きる力を見せてくれます。でも、それを五輪に矮小化してはいけません。



子どもが初めて逆上がりができた時、サッカーで初めてゴールを決めた日。できなかったことができるようになり、本人や周りの人に感動を呼び起こす瞬間こそが「スポーツの力」です。勝利至上主義のもと、一部のエリート養成を促す五輪は、これに逆行しています。

東京五輪は中止すべきです。このコロナ禍にあって社会的に弱い立場の人への配慮が決定的に欠けている点は、スポーツを愛する者として看過できない。もし強行すればスポーツに対する世論のまなざしは、より厳しくなるでしょう。

五輪はスポーツの名を借りた商業イベント。そう結論づけた上で、スポーツの価値を本質的に考え、時間をかけて教育現場から見直すべきです。スポーツの信頼が失われるのを静観すれば、50 年後、「スポーツなんてやってるの？ 珍しいね」とも言われかねない。そんな危機感があります。

次に猪瀬直樹・元東京都知事。コロナ禍のなかで五輪を開催するのは、なんのためか、ですか？ 日本がこの状況下で東京五輪を開催できれば、コロナと戦っている世界中の人々に勇気を与えるでしょう。それに、もし日本が開催できないとなったとしても、中国は来年の北京冬季五輪を必ずやります。そうなったときのことを考えてください。日本は国際的な信用を失い、国際イベントを開催できなくなります。だからこそ、「コロナ禍だからやれない」というのではなくて、コロナ禍でもやれる組織力を示し、そして、開催した証拠を残すことが必要です。ピンチはチャンスです。

猪瀬元知事の発言をこれ以上書き写したくない。彼の本性が表れている発言であり、何のための五輪、国民・都民の命より五輪開催を優先する考えには、怒りすら感じる。じつは彼とは、信州大学時代からの「因縁」がある。書き出すと長くなるので、ここでやめておくと、彼の考えと行動には昔から相容れないものがある。

元ラグビー日本代表の平尾さんは、スポーツマンとしての立場から、東京五輪やスポーツに対して鋭く問題を提起している。「スポーツの力」など希望を抱かせてくれた。感謝したい。平尾さんも主張するように、コロナ禍の東京五輪は中止すべきである。

(2021 年 5 月 25 日)